

(4) 北殿城跡



北殿城跡と思われる丘陵



現地に設置してあった標柱

北殿城跡は、梶山橋（めがね橋）を南に向かって渡り、突き当たりを左（東）に200メートルほど行った右手（南）に見える丘陵上に立地しています。山城というより居館に近い小型のもので、伝承がなければ山城とは気付きません。北殿というのは、地名ではなく人物を指すものであり、江戸時代後期に成立した『庄内地理志』巻99において人物の推定が成されています。『三股町史 改訂版』（以下『町史』）の北殿城跡に関する記述（48～51ページ）も『庄内地理志』巻99を参考にしています。

『庄内地理志』巻99は、都城市より発行された『都城市史 史料編 近世4』に収録されていますので、どなたでもご覧になれます（北殿城跡については622～623ページ）。

では、「北殿」とは誰なのでしょう？

『庄内地理志』の編集者は、北殿城跡というのは地元の人の中で伝承として言い習わしているから、当地が北殿城跡であろうとしています。そして、但し書きとして、北という家名を『山田聖栄所記伝』の記述に求め、北殿とは島津久照ではないか、としています。『山田聖栄所記伝』とは『山田聖栄自記』のことでしょうか。『山田聖栄自記』は島津発祥の地はどこか？などでよく引き合いに出されますので、ご存知の方もおられると思います。山田聖栄と島津久照はほぼ同時代（室町時代）の人物ですので、記述自体の信憑性は高いと思われます。ただ、島津久照が北殿城に居を構えたとはまでは書かれていません。北殿と呼ばれた人物が居を構えたから、その館を地元で北殿城（あるいは北ノ城）と呼ぶようになったのではないかと想像しますが、推測の域を出ません。

次ページ以降は、まず都城市教育委員会所蔵・提供の『庄内地理志』巻99収載の「北殿城跡・地頭屋敷絵図」の原本を紹介し、『町史』の北殿城跡に関する記述（長いですが…）を抜粋し、島津久照にまつわる悲話を紹介したいと思います。



『庄内地理志』巻99 「北殿城跡・地頭屋敷絵図」

都城市教育委員会所蔵・提供（平成19年6月15日掲載許可）

絵図では、「キタノ城跡」となっていますが、文中では項目を立てて「一 北殿城跡」として
 います。内容は以下のとおりです。

- 一 北殿城跡 山を帯る地一段高、後堀切有、古来飢肥之通道此後に有、郷人此を
 北殿城跡と申習ハし候

この後に、「但し…」として『山田聖栄所記伝』の記述が続きます。『町史』の記述と重なり
 ますので、ここでは割愛しました。

以下は、『町史』（昭和60年11月1日発行）からの抜粋（48～51ページ）です。
系図は『町史』ものとは若干異なります。また、文中のゴシック体文字は補足説明であり、『町史』の文中にはありません。

○北殿城跡を築く

石寺原の東南端、切寄の個人宅の川向かい（字城下）に北殿城跡がある。山を帯びた、一段高い高台にあって背後に堀切りがある。

この辺りに古くは飢肥に通ずる道があった。ごく小型の山城である。

この北殿という家名は、『山田聖栄所記伝』に、

「元久公の御時、薩州鶴田発向に、本田忠親元久公を恨むことあり、上総介殿（総州家伊久）三男又五郎忠照（家系には三郎久照）を北殿と申すなり。是を取立申さんとて御款仕り櫛間より志布志に打寄申候儀之有り、然れば家号は時世と対号に依り之を記す」とある。 『庄内地理志』巻99より

（※『都城市史 史料編 近世4』の623ページとは数文字異なりましたが、そのまま掲載しました。）

島津家第五代貞久は九五歳の高齢で没した。貞久の子、師久・氏久はそれぞれ薩摩・大隅を分領して国内の経営につとめた（師久：薩摩守護職、氏久：大隅守護職）。

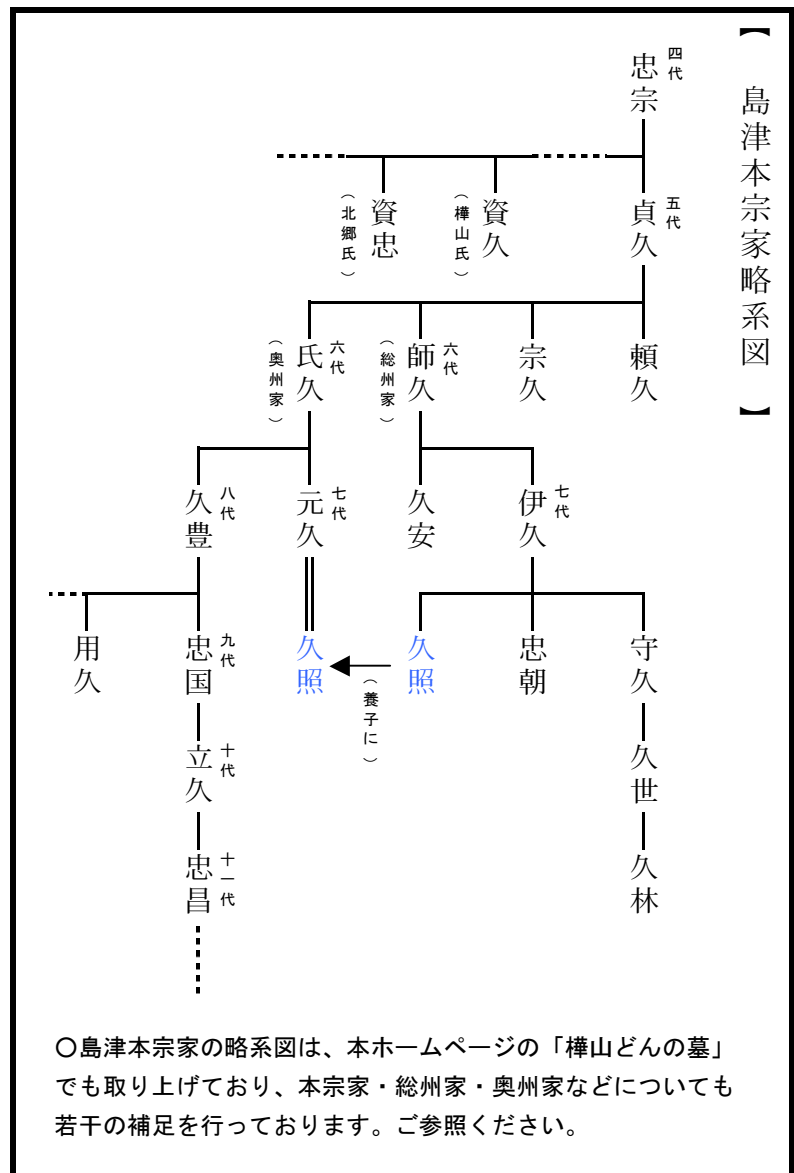
師久の後を総州家（上総介）といい、氏久の後を奥州家（陸奥守）という。従って、守護職は師久・氏久ともに六代である。

ところが、貞久が領国を二分して領内の混乱を鎮めるという目的で、師久・氏久を並べ立てたことは、結果においてよくなかった。乱れた領内の治政はなかなかよくなるに上らず、両家の間も決して円満ではなく、むしろ不幸であった。

元久には跡継ぎがなく、両家（従兄弟関係）の仲を好転させるためにも、伊久の第三子久照を元久の養子に、伊久の一族を元久の夫人にした。

ところが、応永七年（一四〇〇）、伊久・元久不仲となり、元久は養子久照を離縁、元久の夫人も離縁し、義絶した。

本田忠親は、主君元久が北薩の鶴田（伊佐郡）で伊久の勢力と戦っている時、この義絶の不可をいさめたが容れられなかった。そこで、意を決し久照を主将に推して、櫛間を出て志布志に行き、宝満寺に陣を構えたが、志布志を領していた新納実久と戦い、利あらず敗れた。



忠親としては、この戦に敗れた久照を今更ながら実父伊久の元には帰されず、さらばとて兩家の戦いのさ中であるし、その処置に窮したあげく、頼って来たのが都城であろう。その際の経過地は不明であるが、櫛間～飢肥～北郷～梶山の道筋が考えられる。

当時、都城領主は北郷義久であったが、義久はここ梶山に北殿城跡を築かせ、悲運孤独の若き北殿をかくまう館としたのではないだろうか。応永元年の第一梶山城の戦の後七年ごろのことになる。今残る城跡は、およそ五百八十年前のもので、落武者北殿の末路も明らかではないが、武人の薄幸をしをばせる。

『町史』からの抜粋は以上です。総州家と奥州家の仲を取り持つシンボリックな存在になるはずだった久照が、戦乱に振り回されて梶山に落ち延びた様子が『町史』から伝わってきます。当主になるはずだった訳ですから、その無念さも強かったでしょう。このような悲話に史実はどうだったのかという考証を付けるのは、やや無粋な気がします。ただ、考察を行うにしても、久照に関する史料はほぼ皆無に等しいのが現状です。『山田聖栄自記』や『応永記』などで、若干の確認ができる程度でしょうか。本当に、久照が三股に来ていたとしたら、その子孫はどうなったのでしょうか？島津本家の血筋を放置したのでしょうか…更なる悲話が隠されているのかもしれない… 伝承は伝承のままの方がいいのかもしれないね。

〔 略年表 - 北郷三代久秀・弟忠通の墓、樺山どんの墓と合わせてご覧ください 〕

時代	西暦	和暦	出来事	
南北朝	1370)	応安3年	今川了俊（貞世）、九州探題に（九州の南朝勢力打開のため）	
			この頃、総州・奥州両島津家、北郷家、樺山家と了俊の関係良好	
	1375	永和元年	8月	水島の変（島津家が南朝方に転じるきっかけとなった事件）
	1376	永和2年		樺山資久、小山城（高城町）在陣、今川軍と対峙後、樺山城に撤退
	1379	康暦元年		都城合戦 今川満範軍（幕府方）対島津氏久軍（南朝方）
	1392	明德3年		南北朝の合一 しかし、南九州での争乱は続く
室町	1394	応永元年	2月	梶山合戦 北郷久秀・弟忠通、戦死
			7月	島津元久、野々三谷城攻略 樺山音久所領となる
	1395	応永2年	8月	今川了俊、九州探題解任（京都に召還される） ～島津氏、今川氏の南九州退去とともに山東（宮崎平野）進出開始
				総州家と奥州家の対立
				総州家内の抗争
1399	応永6年		元久と久照の関係悪化（総州家と奥州家の対立が根深いことに起因するのか、久照自身に問題があったのか不明）	
			山東計略を進める久豊と実兄元久の関係悪化（久豊による山東に影響力を誇る伊東氏との関係強化策が原因か）元久・久豊兄弟の家督継承問題に派生	
1400	応永7年		久照、鹿児島を出奔（久照廃嫡により奥州家との抗争に発展）	
1401	応永8年		本田忠親、志布志城を攻めるも敗退	
1404	応永11年		島津元久、大隅・日向守護となる	